

新しい Honda デザインの考えに基づいた 2014 年モデル FIT のデザイン

2014 Model Year FIT Design Based on New Honda Design Concept

北 島 義 也*
Yoshiya KITAJIMA

村 川 淳*
Atsushi MURAKAWA

要 旨

今回のフルモデルチェンジで3代目となる2014年モデル FIT は「The World Best Functional Compact」をグランドコンセプトに空間、燃費、かっこよさ（デザインと走り）を兼ね備えた世界でもっとも便利で使えるコンパクトカーを目指して開発した。

2014年モデル FIT のデザインは Honda デザインの新たなコンセプト「Exciting H Design」を取り入れた第一弾となる。

「Exciting H Design」とは人間中心のマンマキシマム、メカミニマム思想を核に、人に優しい先進性をあらわす「High Tech.」、動きのある骨格をあらわす「High Tension」、五感に響く質感をあらわす「High Touch」の三つから構成される。

「Exciting H Design」のコンセプトを取り入れることで、世界の中でより強い個性と存在感を主張することができる2014年モデル FIT のデザインが実現できた。

ABSTRACT

The 2014 model year FIT is the third generation of the model having undergone a full model change. Under the grand concept of “The World Best Functional Compact”, it was developed with the aim of making it the world’s most convenient compact car to use by offering exceptional space, fuel economy, and coolness (design and cruising).

The design of the 2014 model year FIT is the first to incorporate the new Honda design concept, “Exciting H Design.”

“Exciting H Design” consists of three facets: “High Tech” (people-friendly advanced technology built on the human-centered “Man Maximum, Machine Minimum” concept), “High Tension” (dynamic-looking framework), and “High Touch” (texture that appeals to the senses).

By incorporating the “Exciting H Design” concept, Honda has achieved a 2014 model year FIT design capable of asserting stronger individuality and presence in the world.

1. はじめに

2001年モデル Fit(初代 Fit)は、センタタンクレイアウトという革新的なパッケージング技術を核にスモールカーに「革新」を起こし、2008年モデル FIT(2代目 FIT)は初代 Fitの良さを引継ぎながら全方位で進化した。世界的な広がりを見せているダウンサイジングの流れと共に大ヒットを続け、現在世界123ヶ国、世界販売累計が487万台にも及ぶ、大変多くのお客様に愛され続ける商品となった。

*四輪 R&D センター

3代目となる2014年モデル FIT(新型 FIT)は世界的ロングセラー商品のスーパーカブのように人々の身近で暮らしを支え、お客様の毎日に喜びをもたらす世界のベーシックカーとして創造したいと考え、「The World Best Functional Compact」(Fig. 1)をグランドコンセプトとした。

スモールカーの普遍的な価値を空間、燃費、かっこよさに定め、それぞれを驚きのレベルにまで引き上げることを目指し開発をおこなった。



Fig. 1 Grand concept

2. デザインコンセプト

世界的なスモールカー市場の拡大で競争が激化する中では、デザインは埋没しない強い独自性が必要である。そこで Honda デザインの新たなコンセプト、人に優しい先進性をあらわす「High Tech.」、動きのある骨格をあらわす「High Tension」、五感に響く質感をあらわす「High Touch」の三つから構成された「Exciting H Design」(Fig. 2)の考えを取り入れて、エクステリアデザインのコンセプトは「CROSSFADE MONOFORM」(Fig. 3)、インテリアデザ

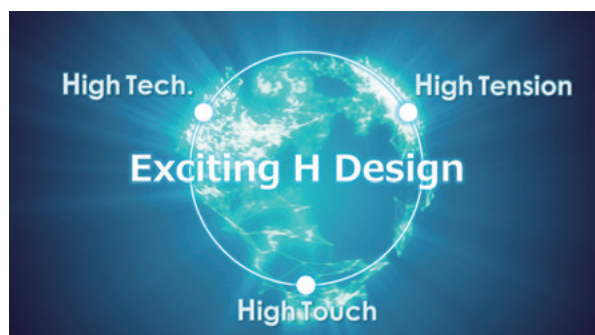


Fig. 2 Exciting H Design



Fig. 3 CROSSFADE MONOFORM

インのコンセプトは「Sophisticated Futuristic Cockpit」(Fig. 4)に定めた。

グローバルで強い独自性を表現するために、新しい Honda 車の統一されたフェイスデザイン、ソリッドウイングフェイスの採用や先進インタフェースによる「High Tech.」、ダイナミックな塊感やパーソナルなコックピット骨格の「High Tension」、スモールクラスを超えた高い質感を持つ「High Touch」を実現した。



Fig. 4 Sophisticated Futuristic Cockpit

3. パッケージレイアウト

新型 FIT のパッケージコンセプトは「SMALL MAX PACKAGE」(Fig. 5)に定め、マンマキシマム、メカミニマム (MM) 思想という Honda 伝統の開発思想のもと、さらに空間効率を高め、初代 Fit、2 代目 FIT を超える広々とした室内空間を確保することを目指した。

2 代目 FIT に対し全長で 55 mm、ホイールベースを 30 mm 延長した上で乗員前後方向の距離 (タンデムディスタンス) をホイールベース延長分以上の 80 mm 拡大した。リ

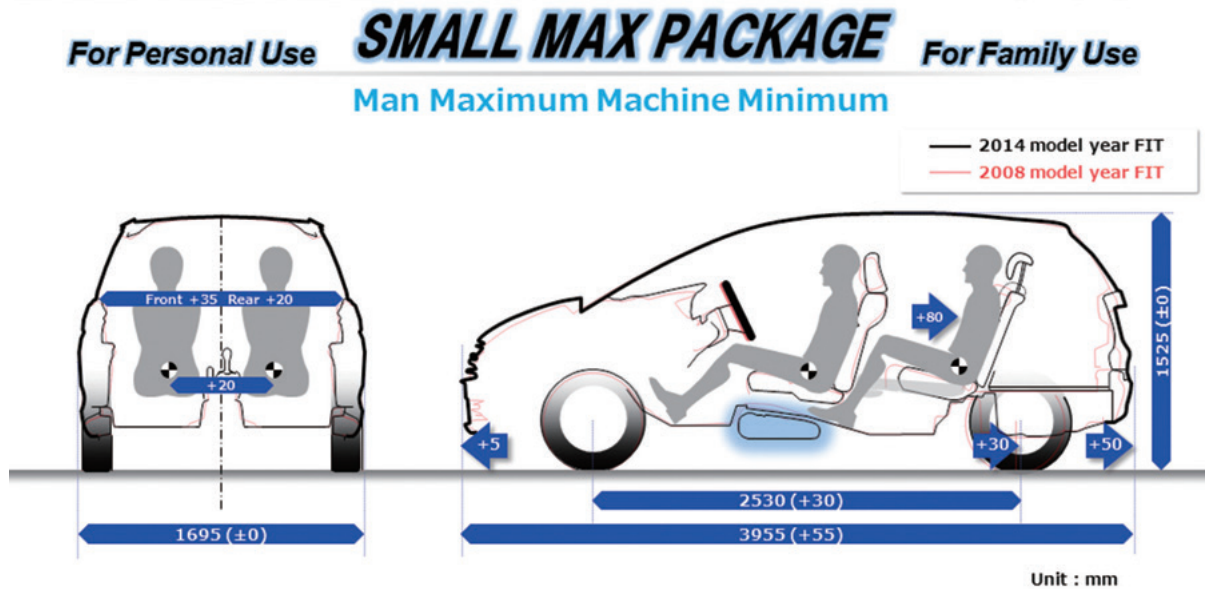


Fig. 5 Package concept

ヤサスペンションの前後長短縮によりリヤ席を設置するクロスメンバを後方へ移動し、リヤホイールアーチのフランジ短縮化やリヤドアの開口拡大により、リヤ席の乗り降りのしやすさを損なうことなくタンデムディスタンスを拡大した。

幅方向の室内空間も全幅は2代目 FIT と同じとしながらもドアライニングの形状、サイドウインドウの配置を変えることで乗員肩まわりの広さを拡大した。乗員間の横方向の距離（カップルディスタンス）は 20 mm 広げながら、肩まわり広さも前席で 35 mm、後席で 20 mm 拡大することで2代目 FIT を超える広々空間を達成した。

4. エクステリアデザイン

エクステリアデザインでは新型 FIT のグランドコンセプトである「The World Best Functional Compact」を表現するために、広い空間と便利さの象徴である一筆描きのようなデザイン（ワンモーションシルエット）を初代 Fit、2代目 FIT から受け継いだ。

先進技術の象徴である短いエンジンフードとスムーズに連続したキャビンで構成された上半身の塊と、タイヤを強調するしっかりとした下半身の塊がぶつかり合って融合する「CROSSFADE MONOFORM」をコンセプトに、クラスを超えた車格感と世界で通用する移動体としてのダイナミックさを追求した。また、新型 FIT から始まる「Exciting H Design」のもとに、「High Tech.」、 「High Tension」、 「High Touch」の三つの要素を取り入れ、存在感を強く示すデザインを目指した (Fig. 6)。

「High Tech」は、新しいデザインアイデンティティとしてソリッドウイングフェイスの具現化を目指した (Fig. 7)。これは新型 FIT に搭載している EARTH DREAMS TECHNOLOGY によるクラス最高水準の燃費を誇る革新パワートレインを表現する役割を持っている。

新型 FIT のフロントフェイスデザインについては、ソリッドウイングフェイスの考えをもとに日本だけではなくグローバルで通用する表情を目指してデザインをした。初代 Fit から 2代目 FIT まで続いていた愛らしい小動物の表情から、小さくても精悍でたくましいライオンの子供の

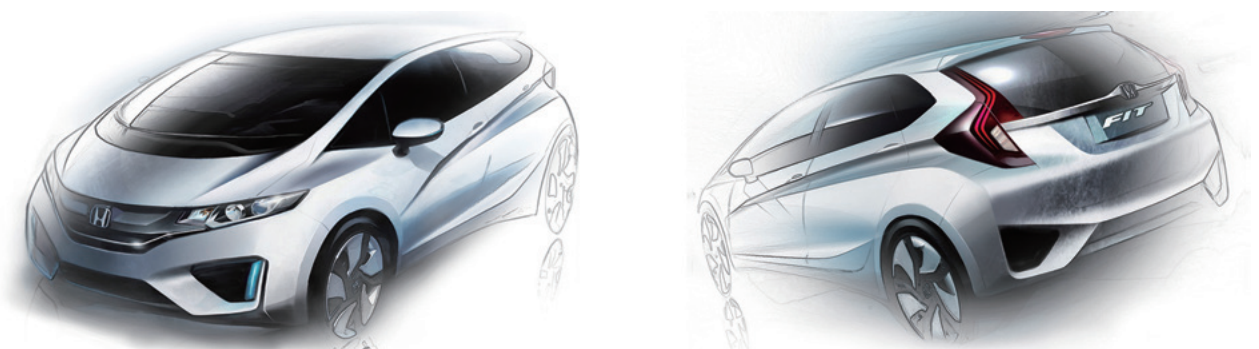


Fig. 6 Final exterior rendering

ような表情をねらいとした (Fig. 8)。これには世界の厳しい競争社会で勝ち残るための独自性と強さを持たせるねらいがあった。独自性を強調するにあたり、横長でシャープな印象を生み出す天地の薄いヘッドライトと、レンズと質感を合わせたフロントグリルを連続して配置することでダイナミックなイメージと先進性を表現したフロントデザインとした。

ソリッドウイングフェイスは「H」マークエンブレムを中心に羽を両脇に広げているイメージであり、Hondaの先進技術が世界中に羽ばたいて欲しいという願いが込められたものである。羽ばたきを表現するにはフロントグリルからヘッドライトまでをひとつの繋がりとしてデザインする必要があった。ヘッドライト表面のレンズの質感とフロントグリルの質感を近づけるアイデアが不可欠であるが、単純に同じ質感にするにはフロントグリルの部品構成をヘッドライトと同じようにレンズとメッキ蒸着されたハウジングという部品構成にすれば可能である。

しかし質感は揃うのだが重量やコストが一般のフロントグリルに比べ倍以上になり、新型FITに求められている燃費性能や価格面に影響を及ぼしてしまう恐れがあった。そこで、より軽量でコストを抑えながらねらっている質感を実現できないかと考えた結果、フロントグリル表面を3mm厚のスモークアクリルプレート（透過性のあるもの）にし、その裏側からメッキ蒸着に見えるミラーインク塗装を施した。そのためレンズ越しにメッキ層が見えるというヘッドライトの構成部品に近い見え方が可能となった。さらにアクリルプレートの裏面にかまぼこ状の凸をつくることで、表から見ると3mm厚のプレートとは思えない奥行きを持った高い質感のフロントグリルが実現できた。

先進性の表現としてはフロントとリヤのバンパデザイン

ンにも意思を込めており、レイヤードウイングという羽と羽が重なり合うモチーフで表現した。これは新しいスポーティ感の表現を目指しており、従来のパワーを見せつけるものではなく、自然界にある風を利用して推進力を生み出していくイメージを目指した。またフロントバンパのセンタ開口部分とバンパ下端までをすべて黒いパーツにすることで、バンパの立体的な奥行きを持ったウイング形状をより際立たせた存在に見せている (Fig. 9)。

リヤ側にも先進性を感じさせる特徴をリヤコンビランプとテールゲート側に配置されたリッドランプで表現した。LEDを光源としたライン状に発光する2本の導光チューブを使い、テールランプとして光らせることで周囲が暗くなってもひと目で新型FITだと認識できる先進的で存在感のあるデザインを実現した (Fig. 10)。

「High Tension」は、初代Fit、2代目FITから受け継いだワンモーションシルエットをダイナミックに見せることで、鍛え抜かれた美しいプロポーション、アスリートフォルムの実現を目指した。

サイドビューのシルエットでは、世界中を駆け回る新型FITとしてお客様に安心して乗ってもらうための強さや安心感が必要だと考えた。特徴である短いエンジンフード長を強く見せる手法として、ヘッドライトを低い位置に設定しエンジンフード先端の高さを高く配置して厚みを増やした。走り抜ける際の力強さや見た目上の安心感を兼ね備えた表現とした。

高いエンジンフード先端から一筆書きで繋がっていく



Fig. 7 Front face identity



Fig. 9 Layered wing bumper



Fig. 8 Change in facial expression



Fig. 10 Rear design

ルーフラインにもダイナミックに見せる手法を取り入れた。ルーフラインの一番高い位置を前席の頭上に設けて、そこから後席の頭上やルーフエンドへと徐々に下がりがながら後方へ抜けていくラインで、流麗でありながら前へ進もうとする動体としての動きを持ったルーフラインを表現している (Fig. 11)。実際にこのシルエットの造形は、空力性能の向上に貢献している部分でもある。またサイドから見たリヤエンドのシルエットにも動きを持たせる手法を施した。テールゲートにあるリヤウインドウの上端を前方にもって行きウインドウを前傾形状とすることで、ルーフラインと共に塊が前へ突き進んでいくようなサイドビューシルエットを実現した。ダイナミックさをさらに強調させるポイントとして、斜め前から見たときの前廻りと斜め後ろから見たときの後ろ廻りに動体表現を取り入れた。

前廻りは、横長のソリッドウイングフェイスと広がりのある豊かなエンジンフード面、立体感のあるフロントフェンダを作ることでダイナミックな表現を目指した。2代目 FIT はフロントフェンダ上面にまで大きく食い込むような大きなヘッドライトが配置されていた。そのためフェンダのデザインはボデーの側面だけで表現されていて造形自由度が少なかった。そこで新型 FIT はソリッドウイングフェイスを採用することで、ヘッドライトがフェンダ上面にまで食い込むことも無く、上面と側面をもった立体的なフロントフェンダ (Fig. 12) を実現することができ、クラスを超えるダイナミックさとワイド感を表現することができた。

後ろ廻りは、躍動感を表現するために上側と下側の二つの塊で構成した。上側のキャビンの塊は、キャビンを絞り込むことで広い空間のワゴンイメージを緩和させることをねらいとした。下側のボデーの塊は、上側との対比で外側に大きく張り出して見せることで走りの安定感を表現するねらいがある。安定感を出すために、キャビンよりタイヤを外側に配置して、タイヤが踏ん張って見える骨格にし

た。踏ん張ったタイヤと共に、ボリュームのあるリヤバンパ部分は彫りの深い造形にすることで、力強さだけではなくスモールカーらしい軽快な走りのイメージも作り出している (Fig. 13)。上下二つの塊の構成はエンジンフードからテールゲートに至るまで、クラスを超えた豊かな造形面を生み出し、車本来の魅力である、ダイナミックさやパフォーマンスを感じさせる骨格や構成を実現した。

「High Touch」は、5 ナンパサイズ (全幅 1695 mm) という限られたサイズの中で、人の心をひき付ける彫りの深い抑揚のある面質を実現するドラマチックサーフェイスを目指した。ドラマチックサーフェイスとは、シャープなエッジと豊かな面質が融合することで、メリハリと変化に富んだ面質表現を目指している。

フロント廻りは、フロントピラーがエンジンフード面に勢い良く切り込んでいくシャープなエッジラインと、そのエッジと融合するフロントピラーの根元にある立体的で抑揚のある面質の変化で表現した。クレイモデルで幾度となく熟考を重ねながら、大きなキャビンを支えながらダイナミックな勢いと色気を感じる面質を実現した (Fig. 14)。

ボデーサイド廻りは、パッケージレイアウトとメカレイアウトとのせめぎ合いであった。パッケージレイアウトでは空間の拡大を目指したために、全幅に限りがある新型 FIT では外側と内側のあいだの壁の厚みが薄くなっていた。壁が薄いということは、エクステリアデザインのデザインスペースやメカレイアウトのスペースも減少していることを意味している。メカレイアウトでは、ドアのヒンジ廻りと衝突に対応したビーム、それにサイドウインドウの昇降軌跡やドアハンドルの位置などの複数の要素が関係して、レイアウトを常に確認しながらのデザイン作業となった。メカレイアウトとの干渉を回避するためのデザイン線を、細いラインテープを使ってフルサイズのクレイモデル

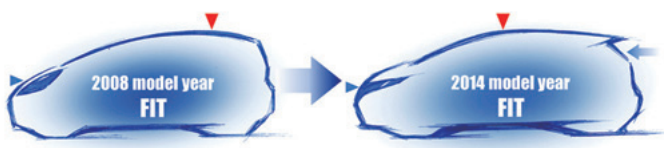


Fig. 11 Side view silhouette



Fig. 12 Front fender



Fig. 13 Rear design



Fig. 14 Engine hood design



Fig. 15 Side panel design

上にラインを引き、そのラインをガイドにしてクレイを盛り付けたり削ったりして造形をおこなった。造形を終えるとクレイモデルにシルバのフィルムを貼り込み、屋外でモデルの見え方や改善箇所の確認をおこなった。その後、測定器でモデルを測定しメカレイアウトやパッケージレイアウトとの干渉度合いを確認する、といった作業を延々と繰り返した。

特にサイドパネルの抑揚のあるデザインと、ドアヒンジのメカレイアウトの成立性は難しかったが、サイド廻りのドラマチックサーフェイスを表現するボデーセクションなどだけに、こだわりながら造形した。彫りの深いキャラクターラインの溝から鋭角な折れで外側に出て、そこから下側へ向かって膨らみをつけながら内側に強めに入り込み、緩やかな曲率で外に出てまた折れをつけて内側に入っていくというメリハリの強いボデーセクション (Fig. 15) と、センタピラーにある上下に配置されたドアヒンジの下側が常に干渉もしくは飛び出るといった状況だった。このメリハリ

を強めたセクションの実現は新型 FIT の躍動感を左右する重要なポイントである。そこでデザインでは折れのラインとドアヒンジの最適な位置を検討するために、ボデーサイドにあるすべてのラインや面のバランスを取り直し、必要に応じてサイドビューのシルエットにまで及ぶバランスの取り直しをおこなうことで、全幅 1695 mm とは思えないメリハリと変化に富んだ面質を実現させた。これによりスモールカークラスを大きく超えたダイナミックさと高いクォリティーを持った新型 FIT のエクステリアデザインが完成した (Fig. 16)。

5. インテリアデザイン

インテリアデザインでは運転に集中できる先進インタフェースとそれを包み込む造型を質感高く表現する「Sophisticated Futuristic Cockpit」をコンセプトに「Exciting H Design」の三つの要素「High Tech.」「High



Fig. 16 Exterior design



Fig. 17 Final interior rendering

Tension」「High Touch」を取り入れて、スモールクラスを超えた先進性と上質さを表現した (Fig. 17).

「High Tech.」は、先進技術を取り入れ、見やすく使いやすいアドバンスドインタフェースを追求した (Fig. 18). スピードメータの目盛と数字を大きくし、独立した大型のインフォメーションディスプレイをメータ右側に配置して、先進性と瞬間認知性を高めた。

スピードメータ中央部には、虚像式のブルーのリング (Fig. 19) が浮かび上がり、先進感あふれるデザインとし

た。メータの指針中心部より乗員側にブルーの光源を配置し、それをスピードメータの文字盤に向けて照射する虚像方式で、ブルーのリングが実際の寸法以上に遠くに表示されることで、奥行き感のある先進的な見え方を達成した。

センタパネル部においてはナビゲーションシステムとフルオート・エアコンディショナを静電式のタッチパネルに採用してタップ、フリック操作などスマートフォン同様の軽いタッチで直感操作を実現した (Fig. 20).

フルオート・エアコンディショナの下部に横一文字のシ



Fig. 18 Advanced interface



Fig. 19 Meter panel



Fig. 20 Center panel

ルバ加飾を設けているが、その表示の位置に合わせてさりげなく凹凸を設けている。これは指で触った時にスイッチの位置を探れるようにと工夫した所である。

「High Tension」は、スポーティでエモーショナルなパーソナルコックピットを目指して、操作、表示系をドライバ席に集中配置する構成とすることで実現した。

ドライバ席正面のメータパネルを中心に、左右に伸びる金属調加飾をあしらったアウトレットを配置した造形でドライバ中心のインストルメントパネルデザインを強調した。

センタパネルを乗員側に傾けることでドライバが運転中にも操作しやすい、パーソナルコックピット空間を表現した。運転に集中できる、すっきりとした視界を確保するためにインストルメントパネル上面をクリーンな面で造型するとともに、ワイパの停止位置をフロントフード下に設定した。ドアミラーはボデー付けとすることでフロント

クォータウインドウ枠の凹凸を無くすことを実現した。

「High Touch」は、素材感を重視した丁寧なつくり込みで、隅々まで手が込んでいる感のあるクラフトマンシップを表現した。

加飾パーツの価値を高めるために、素材感と一致する造形を追及した。メータパネル両脇やステアリング、シフトパネル、ドアライニングの金属調加飾部分はシャープな造形でより硬質に表現した (Fig. 21)。インストルメントパネルの助手席側ミドル部はソフトパッドパネルを採用し、張りのある豊かな面にしながらステッチ表現を施すことで、柔らかさと高い質感が伝わる造型とした。ソフトパッドパネル下にも金属調加飾を配置することで柔らかさと硬質さ、それぞれの素材感を対比してお互いの質感を際立たせ、高め合うデザインにした (Fig. 22)。

このように一つひとつの丁寧なつくり込みで高い質感を実現した (Fig. 23)。



Fig. 21 Silver decoration panel



Fig. 22 Soft pad panel



Fig. 23 Interior design

6. カラーデザイン

6.1 エクステリア

エクステリアカラーは、お客様一人ひとりの個性にフィットした EXCITING カラーとした。

お客様のさまざまなライフスタイルに合わせて元気フレッシュカラー、洗練パーソナルカラーをキーワードに5色の新色を含め、11色のカラーラインナップを設定した。

元気フレッシュカラーではユニークな色域と新しい質感にこだわり、インパクトのある明快なキャラクターを持たせた色調とした。ハイブリッドテーマカラーの VIVID SKY BLUE P. は雲一つない青空の爽快感をソリッドライクな細かなパールと高彩度ブルーで表現し、環境により配慮した先進性と力強い走りの両立をイメージさせる色とした。

ATTRACT YELLOW P. は街で見掛けた時に誰もが振り返る、ハッとする鮮やかなビビッドカラーを目指した。新型 FIT が持つ軽やかで若々しさを最大限に生かすために高彩度の緑味イエローを選定し、3コートパールを用いダイナミックな形状を強調する上質な立体感を表

現した。

洗練パーソナルカラーでは幅広い年代のお客様のし好性を考慮した大人の感性に訴える洗練された色調の3色を新規開発し、既存色を1色プラスした4色を設定した (Fig. 24)。

6.2 インテリア

インテリアカラーは、お客様一人ひとりの個性にフィットしたハイクラスな高質感コーディネートコンセプトに、触って気持ちよい本物らしい素材感にこだわり、真の上質感を追求した。

黒を基調とした内装カラーはアルミの質感を表現した高輝度シルバ加飾が浮かび上がるメリハリの効いた空間となるようにモノトーンで構成した。

インストルメントパネルのミドル部には、やわらかな革素材のソフトパッドを採用し、クラスを超えた上質感を演出した。シートファブリックは、やわらかな触感と汚れにも配慮した織物を中心に幅広いお客様のし好性を考慮した色、柄を施しそれぞれのグレードで表現した (Fig. 25)。



Fig. 24 Exterior colors



Fig. 25 Interior colors

7. まとめ

スモールカーのあたらしい基準となることを目指し、新型 FIT は機能性、デザインすべてを格段に進化させた。「Exciting H Design」と共に、世界中で強い個性と存在感を主張する新しい Honda デザインアイデンティティの第一弾として認知されながら、多くのお客様の生活にフィットし愛され続けることを願っている。

■ 著 者 ■



北島 義也



村川 淳